

第八章

剣と花



次兄 正にあてた覚悟の書簡

昭和一九年八月一日門司港を出港し、鹿児島を経由して沖繩に向かった野戦高射砲第七九大隊は、二十三日那覇に到着した。

着任後二カ月もしない十月十日、米軍の空爆を受け、以後第二中隊指揮小隊長として戦闘と陣地構築の指揮をとる中で、詩集「剣と花」が書かれた。

詩集は昭和二十年一月本土に疎開する女性に託され、一部は同級の五十嵐大祐を経て無名の女学生に、一部は「蠟人形」の編集者であった大島博光（長野に疎開中）を通じて岡登志夫（丘灯至夫）の手許に届き、その後遺族に引き渡された。

当時新聞社に勤めていた岡の計らいで、終戦直前の八月十日付の福島民報に四十数編の内七作品が掲載され 貴重な資料が残された。

戦時中のため新聞の記事からは、戦意高揚の傾向が高いものだけが掲載された事が伺われるが、一方で戦場しか詩作の場がなかった中でも、命をかけて詩人としての生き方を貫き通した強烈な意志に心を打たれるものがある。

郷かどの才一報が女見の奴、えなに違ふところぞ、鏡玉とは空に感慨
無きま、よくことを生きたと知ゆ、おもし、懐かぬとお嬢、山とがと、ふ
程、ふぢや万令の一にはおありませぬ、胸、うやうやしく、どしためか、一時はす
ろーと下つた感じだね、我々、恥かしのが正に切実なものがある。一筋の
友達は、は毎日、おとよから午紙を出してやりたまへ、涙を流してさぶせ。
詳しく知りたうは、島山のこと、暇、おには書いて下さい。

傳、俊寛、ミ、に、い、り、秋、の、海

例の如く、歌句をいねえ、徒然を慰め、おたと、うござすからね、女見の傳、は
百万の味、うみ、な、の、志、気、太、い、に、あ、る、つ、こ、ね、る。上、前、よ、り、は、あ、つ、と、人、は
が、早、純、に、な、つ、て、一、さ、う、ま、お、と、ま、事、的、心、か、所、謂、を、判、方、お、け、で、お、ワ、サ、リ、し、て
あ、る、泡、盛、世、の、み、す、お、ち、か、な。故、傳、も、あ、る、に、は、あ、ら、か、止、め、お、こ、し、う。
又、酒、で、お、飲、ん、で、大、い、は、天、下、同、水、を、論、ず、る、時、か、あ、る、ら、う、と、思、ひ、ま、す。
ま、い、た、い、こ、と、は、お、り、書、り、し、ま、つ、た、か、あ、し、か、ら、お、女、見、の、健、斗、を、祈

る、塩、を、お、く、め、お、茶、の、味、の、こ、と、わ、か、青、春、味、汗、に、お、ま、み、に、う、

お、は、又



郵便 景山

千葉県千葉郡二宮町蕨木園台
東部軍教育隊四方隊十一区隊

景山 市郎様

軍事郵便



沖繩島那覇郵便局
球ノ二一七二部隊
右側封

生れざる眠りより

谷 玲之介

いまだ光茫は來らず

ものみな
萬有生れざる眠りに眠る

かしこにて星は死せるがごとし

かしこにて森は死せるがごとし

ああ極限を啓示せる苛酷よ

生れざる眠りよりわが眼^{まなこ}めざめ

わが耳はきく

石の窓を吹きすぐる太古の風を

幼き靈魂ゆゑ

孤坐するはさびし

いつこよりか

光茫は來らざらむか

星 夜

谷 玲之介

星がこんなにちかぢかと
かゞやきみちる夜だ
戦ひの前夜とは誰知らう
土くれとひねもす明け暮れて
あたりは次第に狭くなる

わたしは大地にあほむけにねころび

星よ ^{したた}滴りおちよと幼ない聲を放つ

【前二編は戦後昭和二十二年に、「蒼空」故人追悼号に三谷晃一が編集して太田博を偲んで発表したものであり、「剣と花」に掲載されてあったものかは定かではない。内容から沖縄での作品と考えられるため本章で扱うこととした。

なお、三谷は後に沖縄の慰霊の旅に訪れた際に、「星よ滴りおちよ」と歌った人」と太田を偲んでいる。】

那 霸

慘禍なまなまし劫火の跡を見よ
茫々たる焦土
ために天日暗し
風に鳴るは焼け落ちたる電線
或は赤瓦崩れ累なりて
珊瑚石垣かさそゝり立つわが愛あいせし那な霸よ
冷たき骸と化れる新嫁のごと
涙湧なみだかざるゆえに
戎衣むすねひたすら 寒く
わが眦まなじりを裂けしむ

新聞社注記

那霸は敵の無差別爆撃で焦土となった、愛する本土を焼かれた傷痕はかへって敵への激しい怒りを生んだ、怒髪天をついて筆者は『わが眦を裂けしむ』と歌つてゐる、今や次々に中小都市を轟爆する敵に一億の憤りは頂點に達してゐるのだ

防空頭巾

それぞれの^そ創意が光り
いさゝかの隙もない
工夫が隠されてゐる
防空頭巾を被り
きみたちが
^{はげ}激しい律動の作業をつゞけてゐるとき
わたしは見出すのだ
ふかぶかと輝く^ち叡智が
この戦ひの苛烈さを
はねかへし
勝ち抜く誇りに
馥郁と 薫ってゐることを

【新聞社の注記にあるように、陣地構築作業へのひめゆり学徒隊の献身的な協力に、太田は心からの賛辞を記している。休憩時間での純真な彼女たちとの交流と語らいは、荒んだ戦闘に傷ついた詩人の心を癒して新たな詩作の心を誘ったに違いない。やがて「相思樹の歌」が生れてくる土壌が、そこから培われていった。】

新聞社注記

この詩には「女子生徒ら軍作業に協力しあり、連日真摯な作業に感動す」と註が附されてある。防空頭巾を被つての作業ならば無論頭上には敵機が舞つてゐたことであらう、空爆下に眞剣な作業をつゞける女學生たちの姿もまた神の姿でなくてなんであらう

未 完

敵てき既に目睫まげにせまる
『けん劍と花』
わがふるさとへつつが恙なくかへ歸れ
無名詩人は 南島の一角に
雲霞の如き 敵てきをむかへうち
ちぬ廻りたるけん劍を以て
生命と死の花を 描かん

新聞社注記

壮烈な詩を最後にこの詩集は終つてゐる、なほ
作品中には歌謡詩もあり これを知つて目下福島
市に疎開中の作曲家古關祐而氏はこれから數篇を
選び士氣昂揚の資とするため早速作曲にとりかか
ることとなつた

【新聞記事に掲載された五日後の八月十五日に敗戦となり、残念ながら新聞社注記にある古關祐而作曲の歌がつくられることはなかったが、自らを「無名詩人」と名付けた太田博の詩に対する強烈な意志は、長く語り継がれることになった。】